

やすだ のぼる  
**安田 登**  
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）  
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）  
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』  
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

# こまったときの 親鳥の聖人



イラスト 中川 学

悩みは尽きない

正月は、「年神さま」をお迎えする月です。「年神さま」という神様は、「ご先祖さまのことです。ご先祖さまの霊は、一定の期間を過ぎると「年神さま」になって私たちをお守りくださるといのが日本古来の考え方でした。そんな年神さまは、初日の出とともに一年の幸せを運んで、私たちのもとに戻って来てくださいます。さまざま、お盆とお正月だけは私たちが戻っ

## おうしゃじょう ひげき 「王舎城の悲劇」

て来てくださるのです。ご先祖さまである年神さまがやって来るので、お正月には遠くにいる家族も戻ってきて、久しぶりに家族一同が会して一家団欒、みんなで仲良く積みも積もった話をする。となるのですが、ところが世代が変わると、会話がなかなかうまくいかないことがあります。「もう、お母さんったら、私の悩みをぜんぜん聞いてくれないんだから」

「そんなことないわよ。あたしがあなたの悩みを聞いて、じゃあ、こんな風にしたらどうというところ、なんてすぐ反対するじゃない」  
 「だって、本当にそうなんだもの」  
 「しかも、去年は違うことで悩んでいたと思ったら、今年はまだ違う悩み。あなたって悩みの自動販売機なの。次から次へと新しい悩みが出て来るじゃない」  
 「どうせそうよ。誰も私のことをわかってくれないわ」

「なに言ってるの。あたしだって、あなたに負けないくらい悩みはたくさんあるのよ」  
 「そんなことないわ。私の悩みの方がいっぱいあるし、深いのよ」  
 などと悩み比べがはじまったりします。  
 そうなのです。「悩み」は尽きない、それが人間なのです。それは人間に「欲望」があるからです。もちろん、最初は違います。赤ちゃんが泣くのは、おっぱいが欲しいとき、オムツが汚れているとき、そして眠いときくらいです。

「毎日、お母さんのおっぱいばかりで飽きた。たまにはほかのお母さんのおっぱい飲みたいなあ」なんて赤ちゃんはいません。赤ちゃんは「欲求（ニーズ）」があるだけだからです。  
 それが乳児を卒業して幼児になっておもちやを欲しがるようにになると「欲望（ウォンツ）」が始めます。自動車のおもちやが欲しいというから買い与えた。すると今度は飛行機が欲しいと言いつつ、欲求が満たされると、次の欲求が現れる、それが「欲望」です。  
 欲求を解決するという方法ではなんともできないのが「欲望」なのです。

### 王さまの悩み

お寺で読誦するお経の中に『観無量寿経』というお経があります。この中に王舎城の悲劇というお話が載っています。年末の「歳暮の会」でも上演をしましたので、ご覧になられた方はご存知でしょう。そのお話を紹介しましょう。  
 昔インドの王舎城に頻婆娑羅という王様がいました。お后のお名前は韋提希夫人といいます。ふたりは、とても幸せに暮らしていました。しかし、ひとつだけ心のままになれないことがありました。それはふたりになかなか子どもがでなかつたこととです。そこで頻婆娑羅王と韋提希夫人は占い師のもとに赴き、子どもが生まれるだろうかと言いました。  
 占い師は「今から三年の後。あの岩山で修行をしている修行者が死にます。彼が王子として生まれ変わるでしょう」と予言しました。しかし、三年はあまりに長いと思つた王は、この修行者を殺してしまいました。韋提希夫人は、やがて妊娠をしましたが、占い師は「生まれる子は、やがて父王を殺すでしょう」と予言しました。  
 それを聞いた韋提希夫人は、この子を産むべきかどうかを悩んだ末に、塔の上に産屋を作り、そこから下に産み落とし、生まれた瞬間に亡き者にしようと思いましたが、それは実行されました。赤ん坊の指を一本傷つけただけで、その子は無事に産まれてきたのです。可愛い。阿闍世と名づけられたその子は、蝶よ花よと育てられ、聡明な子

として育ちました。もちろん、誕生のときのことを知る人たちには箝口令が敷かれ、そのことを阿闍世に伝える人は誰もいませんでした。

すくすくと育った阿闍世王子。頭もいいし、性格もいい。将来は素晴らしい王様になると誰もが期待していました。ところがここにお釈迦さまのいとこである提婆達多という男が現れます。ちょうどその頃、お釈迦さまは、王舎城のある靈鷲山というところに滞在して説法をされていました。

提婆達多は、お釈迦さまの教団を自分のものにしてしようと、まずは阿闍世王子に近づこうとしました。さまざまに神通力を見せて王子の歓心を買います。さらに、五百の車に五百の美食を載せて彼に与えました。提婆達多は、心の中では「これでお釈迦さまに勝った」と思っていました。しかし、阿闍世の父である頻婆娑羅王は、七百の車に

七百の美食をお釈迦さまに与えたのです。

苦しみは極楽への道

面白くないのは提婆達多。邪魔なお釈迦さまを殺してしまおうと考えたのですが、そのたくらみは失敗しました。そこで今度は阿闍世王をそのかすことにしました。

王子誕生の秘密を知っていた提婆達多はそれを知り、阿闍世王子に伝えたのです。それを聞いた阿闍世王は激しく憤り、父である頻婆娑羅王を捕え、七重にかこまれた牢獄に閉じこめて、王位も剥奪しました。そして、誰ひとり、そこに近づかせないようにと命じました。

三十日が経ったので「父はもう死んだか」と聞いた阿闍世王に門番は「まだ生きていらっしやいます」と答えました。韋提希夫人が、小麦粉とバターと蜂蜜を混ぜたものを体に塗り、また胸飾りの瓔珞のひとつひとつ

にぶどう酒を入れて王のもとにひそかに通っていらっしやったからです。

阿闍世王はそれを聞いて大いに怒り、母親を殺そうと剣に手をかけます。が、月光と耆婆というふたりの大臣に止められ、殺害はやめますが、しかし、母を王宮の奥深くに閉じこめ、外に出ることができないようにしました。

牢獄に閉じ込められた韋提希夫人は、悲しみと憂いに憔悴して、遙か靈鷲山の方に向かって、手を合わせてお釈迦さまを礼拝しました。韋提希夫人が涙を流しながら礼拝をして、顔をあげると、そこにはお釈迦さまのお姿がありました。お釈迦さまは神通力で韋提希夫人の悲しみの声を聞かれ、神通力で来たのです。

韋提希夫人は「私は何の罪があつて、こんな悪い子どもを産んでしまったのでしょ」と泣きながらお釈迦さまに訴えます。お釈迦さまは夫人の

嘆きをただ無言で聞くのです。ひとしきり恨みや嘆きを吐露し終わったあとで夫人は「どうか、わたしのために憂いも悩みもない世界をお教えください。わたしはそのような世界に生れたいと思います」といいます。

すると、お釈迦さまの眉間の白毫から光が放たれたのです。その光の中に現れたのは、清らかな仏の国土、極楽です。

そして、お釈迦さまがいないなくても、極楽を見る方法を夫人に伝授しました。また、お釈迦さまが微笑まれると、その口から五色の光が出て、その光が幽閉されている頻婆娑羅王を照らしたので、王は心の目でお釈迦さまを見ることができました。

すると、心が開け、二度とこの迷いの世界に帰ることのない位に至ることができたのです。親鸞聖人は、このことについて、「ご和讃に『恩徳広大釈迦如来／韋提夫人に勅してぞ／光

台現国のそのなかに／安楽世界をえらばしむ」と詠まれました。韋提希夫人は確かに苦しまれました。しかし、その苦しみは極楽世界に行くためのものだったのです。すべての苦しみは、極楽世界への道であり、苦しみが強ければ強いほど極楽世界は近くなるのです。

本当に楽しいことをする

さて、この王舎城の悲劇は、もうひとつ大切なことを私たちに教えてくれます。お釈迦さまは韋提希夫人の嘆きをただ黙って聞かれました。そう。悩みそのものにはアドバイスを与えてはいません。欲望が尽きないようには、悩みも尽きないからです。悩みは、ただ黙って聞くことが大切なのです。

イジメられている子たちを集めて合宿をします。するとさらに陰湿なイジメが発生し、仲間外れにされる子ができます。ふ

だんイジメられている子たちですから「イジメはやめなさい」といっても効果はありません。では、その仲間外れにされた子が友だちの輪に入れるのはいつなのでしょう。

合宿では、フィンガー！ペインティングといって指に絵の具を付けて絵を描くというのをします。みんなこれが大好きで、最後には相手が着ている服や顔にも楽しそうに笑いながらペタペタと描いていきます。

そんなとき仲間外れにされた彼がその輪に入ると、みんな彼を受け入れるのです。

本当に楽しいことをしている時に人は優しくなります。

お釈迦さまも、韋提希夫人の嘆きに応えるのではなく、本当に素晴らしところ、極楽を見せることで、韋提希夫人の嘆きは自然に消えてました。どんな嘆きや苦しみも、それ以上の喜びの前では消えてしまうのです。